

扉の開け方とドアノブ・ドアハンドルの形状との関連について (その2)

西山紀子

A study on the relationship of door operation to the fixture form

NORIKO Nishiyama

1. はじめに

本研究は、扉の開閉における人の行動・心理が、ドアノブ・ドアハンドルの形状やディテール、位置や配置などによってどのような影響を受けるかを明らかにしようとするものである。前稿では扉の開け方とドアノブ・ドアハンドルの形状との関連性を得たが、属性による差異という課題が残った。そこで本稿では【1】人側の属性として性別、【2】扉側の属性として取り付ける位置を取り上げ、前稿の結果との比較、考察を行った。

2. 調査概要

以下の2つの調査を実施した。

【1】2007年7月実施の調査では対象が男性であったことから、2007年12月19日～20日に女子専門学校生100名を対象に前回と同じアンケート調査^{*1}を実施し、88の有効回答を得た。

【2】【1】の調査と同じ戸を壁の右および左に配置した図(図表—1参照)を示し、同様の調査を行った。2008年1月21日～31日に2007年7月実施と同じ対象にアンケート調査を実施し、89の有効回答を得た。

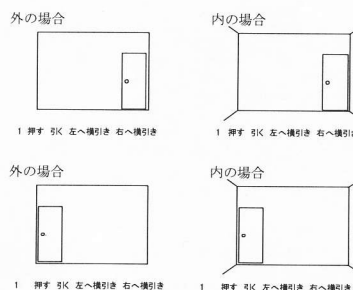
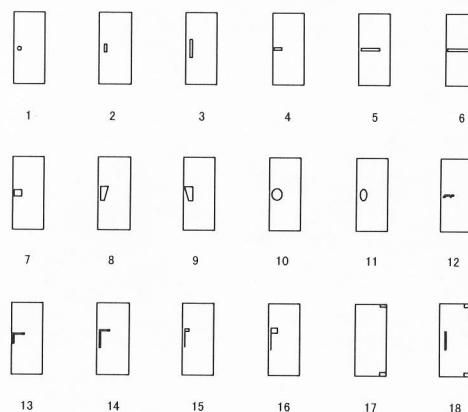
3. 調査【1】の結果と考察

結果は図表—2の通りである。比較検討しやすいように、前稿の調査結果と合わせてグラフに表した。

3. —①「押す」

7番、8番、9番、10番、11番、17番に多いことは男性の場合と変わらない。しかしドアノブ・ドアハンドルがない17番について、男性では内で75%、外で80%を占め最も多かったのに対し、女性では内で43%、外で51%と少なくなっている。これは17番を自動扉と判断したことも含まれるが、その他に肘や腕、さらに肩や腰など身体の一部を使って押すことをあまり考えていないことにもよると思われる。なぜなら女性で最も多いのは10番の正円形で、内で67%、外で68%である。10番以外も上位には手のひらを押し当てやすいような形状を持つものが多く選ばれており、女性には手のひらで押して開けようとする

(ドアノブ、ドアハンドルの種類)



図表—1 調査【2】の調査内容

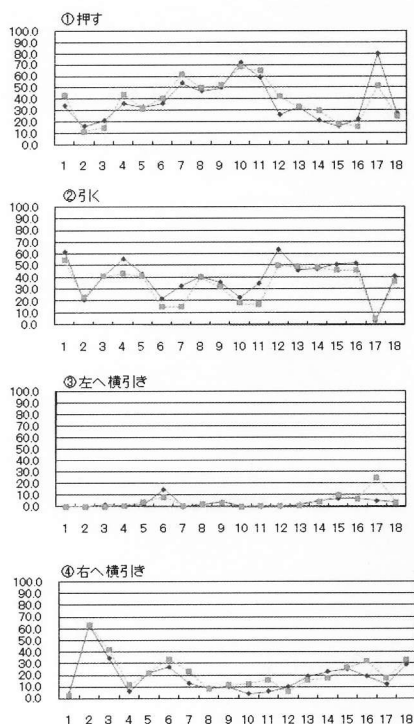
る傾向がうかがえるからである。不整形のものより整形のものほど比率が高い、ドアハンドルの形状が手のひらの形や大きさに沿うかどうか判断の基準にされていることなどは男女で変わりが無い。尚、内外でこの傾向に大きな差異は見られなかった。

3. —②「引く」

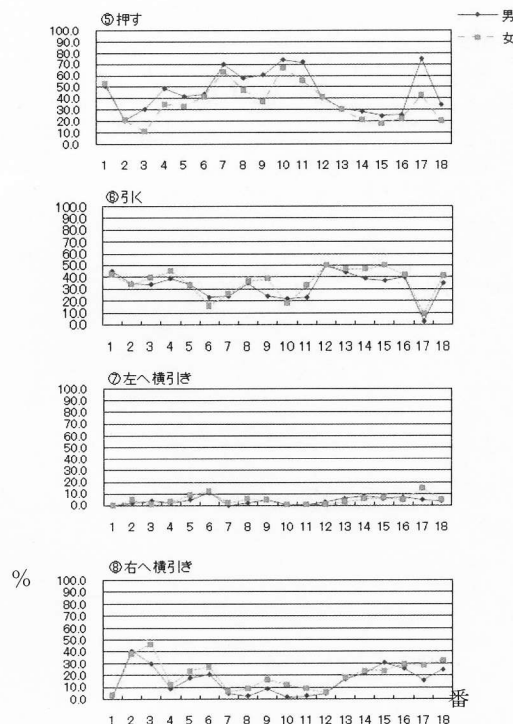
1番、12番、13番、14番、15番、16番に多いことは男性の場合と変わらないが、いずれも45%から55%の範囲で、男性の場合に比べ比率のばらつきの少ないことが特徴である。これは内外ともに見られる傾向である。女性は全体的に、内の場合では「引く」が多く、「押す」が少ない、外の場合では「押す」が多く、「引く」が少ない傾向が見られる。ただし、1番のドアノブは外で55%を占め最も多かったのに対し、内では42%で6位となり、外より内は「押す」が約10%多くなっている。これは全体的な傾向に逆行する結果であった。

3. —③「左へ横引き」

外の場合



内の場合



全体として、ドアノブ、ドアハンドルの形状が判断の有力な手がかりであることが確認された。扉の位置が変わっても、縦および横に長い形状(バー)は判断が難しいことになりはなかった。また、被験者の育ってきた環境や日常生活での体験、個人の性格や癖なども判断に影響を及ぼしていると推察された。「押す」では扉の位置による差異は見られな

図表—2 調査【1】の結果

この調査では「左へ横引き」は考えられにくい。最も多く選択されたのは17番で、内で15%、外で25%である。これは自動扉と判断したものと考えられるが、男性の場合は「押す」と判断することが多かったため、内外とも5%にとどまっている。

3. -④ 「右へ横引き」

内では3番が47%、2番が39%を占め、外では2番が64%、3番が42%を占める。いずれも縦に長い形状のものであるが、3番の垂直バーと同じ長さでも、13番、14番、15番、16番のL字型になると「引く」と判断されることが男性よりも多い傾向にある。「左へ横引き」も合わせ、内外とも女性の方が「横引き」することが多い結果となっているが、これらのことは、被験者の通う学校の教室の扉が男性ではドアノブの付いた開き戸、女性では縦に長い形状のドアハンドルが付いた引き戸であったことが関係していると考えられ、一概に男女の違いとは言えない。17番は内で27%、外で17%であり、従って17番は「左へ横引き」と合わせると内で43%、外42%となり、このことから女性の自動扉に対する期待感がうかがえる。

4. 調査【2】の結果と考察

調査【2】の結果は取りまとめて日本建築学会に報告した。^{*2}その概要は以下の通りである

かったが、「引く」では側面の壁の有無、もしくは壁の有無の連想が判断に影響していると考えられ、特に外で右側に扉が配置されている場合にその傾向が見られた。「左へ横引き」「右へ横引き」では引き込みのスペースの有無が、有力な判断の手がかりとなっていると確認された。

5. まとめ

これまでの3回の調査から、人は扉を開けようとするとき、その操作についての情報の多くをドアノブやドアハンドルから得ていることが確認された。その後インタビューによる調査を行い、「『押』『引』」の表示はあまり注意して見ていない」との発言を得た。従って扉の開閉時に正しい操作を促す上で、ドアノブやドアハンドルの形状が果たす役割は大きいと考える。

またD. A. ノーマンによると、人の行動はそこで受け入れられている文化的慣習に制約を受けるものであるとされている。^{*3}従って特に生活行動を対象とする本研究では、属性の関連性を把握することは必要不可欠であると考えられる。今後も、形状による判断についての属性による違いを調べるとともに、ペーパーによる調査から実際の人の開閉行動へと方法を展開して考察を進めたい。

*1 日本インテリア学会第19回大会研究梗概集 P.31,32

*2 日本建築学会 2008 年度大会学術講演梗概集 P.89,90

*3 D.A.ノーマン 「誰のためのデザイン」 P.137,138